

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

第6回 一包化や薬の配達に“専門性”はあるのか

空振りする薬剤師の奮闘 思いやりが過ぎる周囲の専門職

地域包括ケアでもそうですが、チーム医療や多職種連携の重要性は言うまでもありません。最近では、Inter Professional Working (IPW)やInter Professional Education (IPE)といった言葉も散見されるようになりました。

医療という大きな枠組みの中で、専門分化が進むことはよいことですが、どんなに領域が分かれても、その治療を受ける患者さんは一人ですから、関係するさまざまな職種はその専門性を越えて連携しなくてはならないのは当然のことです。

このような流れの中で、現在のチーム医療や多職種連携の現場や、それに向けたさまざまなディスカッション、さらにはインフォーマルな集まりなどでも、また、IPWやIPEの現場でも薬剤師がメンバーに入っていくことが増えています。しかし、そこで薬剤師自身や周囲が盛り上がっているかという、若干微妙な感じが見られることが少なくないと感じています。

もちろん、薬剤師はがんばろうとしていますし、周囲の医療・介護の専門職も薬剤師も一緒になってやっいていこうと思っています。ただ、薬剤師の奮闘ぶりが空振りしたり、周囲の専門職の思いやりが過ぎたりすることがあるように思うのです。

それは、チームにおける薬剤師のポジションに迷いがあるのではないかというのが私の考えです。

分かりづらい薬剤師の“専門性” 問題解消で多職種連携円滑に

異なる職種が連携して動くためには、お互いの職能を知り、そしてその専門性に対する尊敬・尊重が必要だと思えます。専門性には、当然のことですが、優劣

はなく差異があるだけで、すべての専門性は患者さんの状態がよくなるために必要不可欠なものであるという共通認識が必要だと思うわけです。

では、チームにおける薬剤師のポジション、そしてそれを達成するために期待されている職能は何でしょうか。私は多くの場合、薬剤師は「クスリ」の専門家として調剤をし、情報とともに患者さんのもとに「供給」し、さらには要介護高齢者においては、さまざまな服薬支援も行ってコンプライアンスを担保するように工夫をするというように思われているのではないかと思います。

お薬がなければ薬物治療は始まりませんし、それが実際に患者さんの手元にあって適正に使用されなければ、医師が想定した医療が最終的に行われなくなってしまいますから、このことの重要性は言うまでもありません。

しかし、そこに専門性があるかという、この10年ほどでかなり微妙になってきているのです。なぜなら、お薬を取りそろえたり一包化したりするという業務は、その多くの場面において機械が活躍することが増えてきました。また、お薬の情報を得るだけであれば、インターネットが普及してきました。さらに、お薬を配達したり、お薬カレンダーや服薬ボックスにきれいに入れ込んだりしていただければ、法律の適用をどうするかという課題は残りますが、作業そのものは薬剤師の専門性が必要とされるモノではないように見えているのです。そして、その印象はかなり当たっているのではないのでしょうか。

そうすると、薬剤師をチームに加えようとしたときに、専門性が分かりにくく、また、その内容についてリスペクトしづらいという状況になっていきます。

地域包括ケアの中で、薬剤師が有機的に組み込まれ重要な部分を担って活躍していくためには、この根本的な問題を解決する必要があるのです。